

1.「安曇野フィールド・トリップ(地域活性化ワークショップ)」の実施

1.1. 位置づけとねらい

安曇野フィールド・トリップは、地域社会イニシアティブ・コースの講義「地域活性化ワークショップ」の一環として企画されたものであり、修了生の活動組織である信大地域フォーラムとも連携して実施された。このフィールド・トリップのテーマは、「地域を考える ―合併後 2 年半を迎える安曇野市の現場から」である。具体的には、地域を把握する方法を学びながら、合併を中心に地域が当面しているさまざまな問題を考えるために、「拾ヶ堰」、「臼井吉見文学館」、「農産物直売センター」を訪問した。さらに、安曇野市の堀金公民館で、＜平成大合併＞で成立した安曇野市が当面する地域問題についてレクチャーを受け、意見交換を行った。

1.2. 実施要領

■日程

2008 年 4 月 26 日（土）（オリエンテーション）、2008 年 5 月 24 日（土）（フィールド・トリップ）

■行程

2008 年 4 月 26 日（土）

- ・ 大学院講義「地域活性化ワークショップ」のオリエンテーション
- ・ 修士論文のテーマ設定に向けての基本的な考え方
- ・ 「信大地域フォーラム研究交流誌 Field」にみるテーマの設定
- ・ 研究テーマを設定していくプロセスとは ―M2 在籍生・修了生の経験から―
- ・ M1 院生の研究テーマの設定についての見通し
- ・ 現場（フィールド）に基礎を置く研究方法と研究技術

2008 年 5 月 24 日（土）

- ・ 安曇野市の堀金公民館前集合
- ・ 堀金公民館・下田平裕身特任教授によるレクチャー
- ・ 拾ヶ堰の現地見学・滝沢勝男氏によるレクチャー
- ・ 堀金公民館・下田平裕身特任教授による再レクチャー
- ・ 農産物直売センターの見学・池田正人氏によるレクチャー

■参加者

教員 3 名、院生 13 名、修了生 3 名の計 19 名

1.3. 実施内容

（1）オリエンテーション

まず、4 月 26 日（土）に開講された、「地域活性化ワークショップ」は、第 1 回目の講義ということで、今後の本講義のオリエンテーション及び、修士論文のテーマ設定に向けての基本的な考え方について議論を行った（第 1 部）。担当教員である下田平裕身特任教授は、本講義が他の大学院講義「個人課題研究ワークショップ」や「フィールドリサーチの方法と実践」などと連携しながら進められることを述べ、今年度の講義内容は、大学院の OG/OB 組織である「信大地域フォーラム」のメンバーの協力を得て、県内外のさまざまな現場を訪ねることを計画していると説明した。その後、修士論文のテーマ設定について下田平特任教授から、研究テーマを模索するプロセスが非常に重要になること、その研究テーマの設定は、研究材料、研究方法のプランとセットになっていること、さらにはその根底には「社会科学的な考え方」および「社会科学的な表現方法」という重厚な理論的前提があることが説明された。次に、研究テーマを設定していくプロセスについて、今年度修士論文を執筆予定の在籍生や修了生が、その実情や経験を語った。その後、修士 1 回生が各自の研究テーマの設定についての見通しについて発表した。

第2部では現場^{フィールド}に基礎を置く研究方法と研究技術についての具体的説明ということで、長野市における北京オリンピックの聖火リレー騒動を題材に討論した。その際には、聖火リレーをとりまく多様なアクターを抽出する「要素分析」を行うことで、現場で起きている現象の意味が鮮明化される。さらには、演劇の脚本作りを例に、舞台はどのように設定されているか、どのような登場人物が存在し、それぞれがどのように動いているか、というような方法も現場^{フィールド}をめぐる現象を分析するために有効であることが、下田平特任教授によって講義された。



(2) 堀金公民館・下田平裕身特任教授によるレクチャー
オリエンテーションを経て、5月24日(土)12:30から2時間弱、安曇野市の堀金公民館の会議室にて信州大学経済学部の下田平裕身特任教授より、合併後2年半を迎える安曇野市の現場についてレクチャーを受けた。下田平氏は、学術者という立場から、安曇野市の合併に深く関わられた経験をもつ。

安曇野市では、合併して2年半が経過しており、人口3万人前後の豊科町と穂高町がリーダーシップをとり、両町に隣接する人口1万前後の三郷村、堀金村、明科町がこれに加わる形で合併が成立している。平成大合併では、いわゆる吸収合併型が圧倒的に多いのだが、安曇野市の合併については、合併の中心となった旧穂高町と旧豊科町がともに、財政的に窮迫しておらず、そのような中でほぼ同一規模の町がまとまり、対等に合併した珍しいケースである。



この合併に深く関与した下田平特任教授からは、「合併した5町村の異なる個性は、どうなるのか」「合併により大規模化した地域運営の課題とは何か」「農業衰退に伴う乱開発の防止策を合併後はいかに継続実施するか」という視点からのレクチャーが行われた。これに加えて、航空写真等の資料を活用することで安曇野市の地域的個性を地理学的に理解する方法についての説明がなされた。安曇野地域は、北アルプス山系と、「東山」と呼ばれる低山地帯のあいだに挟まれた扇状地であり、＜水＞の魅力に富んだ地域である。これを工業用水として計画的に利用することで、一帯は、特にハイテク型のエレクトロニクス系の製造業を中心とする産業を誘致できてきたということが説明された。また、観光資源・農業用水としても活用してきており、この水資源が、ワサビ栽培やマス養殖といった地域の魅力的な個性を築いてきたこと、その反面で、現在では、湧き水の汚染、水量の減少が問題視され始めていることなどを学生とともに理解した。

ひととおり、安曇野市の合併後の現状についてレクチャーを実施した後、安曇野地域の農業用水を歴史的に確保してきた「拾ヶ堰」の現地見学に赴いた。

（３）拾ヶ堰の現地見学・滝沢勝男氏によるレクチャー

堀金公民館でレクチャーを実施した後、堀金公民館から近距離に位置する「拾ヶ堰」の堰沿いへ移動し、14:00 すぎから滝沢勝男氏より、江戸時代から農業用水を確保するために掘削された「拾ヶ堰」の経緯についてレクチャーをしていただいた。

滝沢氏は安曇野市の水、特に地下水をテーマに研究した地域社会イニシアティブ・コースの修了生である。滝沢氏の説明によれば、安曇野地域では、江戸時代に盛んに農業用水の掘削が行われ、代表的なものには、「拾ヶ堰」「勘左衛門堰」「矢原堰」などが存在している。安曇野の扇状地は砂礫質で水はけが良く、地表面の水はこの麓（扇央）で地下に浸透してしまい、その後、海拔 520～525m のところで、再び地上に出て湧き出してくるという特色を持っている。このために、安曇野地域では、耕作地が少なく、湧き水の出る地域でのみ水田耕作が可能で、未耕作地が多かった。滝沢氏により、この地域の地理的個性に基づくこのような用水不足を解消するために、江戸時代に、「堰」を掘削して、塩尻の方から流れてくる奈良井川から水を引くことで、安曇野の広大な地域を灌漑してきたのが、「拾ヶ堰」であるという説明をしていただいた。



「拾ヶ堰」について面白い点についても説明していただいた。

例えば、その一つは、この用水掘削が、今風にいえば、「民活」で行われたことである、ということが述べられた。この地域は松本藩の領地にあたるが、この掘削の計画から資金調達、工事の実施をリードしたのは、領主の松本藩ではなく、有力名主たちだった。それは、大工事であり、「拾ヶ堰」と名付けられたのは、当時の江戸時代の 10 の村を通過したからであるという。このようなエピソードを紹介していただいた。

（４）堀金公民館・下田平裕身特任教授による再レクチャー

「拾ヶ堰」の堰沿いで現地見学とレクチャーを実施した後、堀金公民館に戻った。14:30 ごろから信州大学経済学部の下田平特任教授により、幹線道路の変化から、地域の経済・社会の変化を分析する方法について説明していただいた。

まず、資料として用意した国土地理院発行の地図や航空写真の地図などから、地域の幹線道路の位置を確認した。安曇野地域内には、松本方面から、日本海側に向かって、4 本の道路がほぼ並行しながら走っており、東側から西側に、19 号、147 号、広域農道、山麓線が並んでいる。4 本の道路の中で、歴史的に最も重要なのは、国道 147 号であり、これは大町から糸魚川に至る幹線道路で、いわゆる「糸魚川ー静岡構造線」に沿っており、「塩の道」と呼ばれた道路である。航空写真によって、147 号沿いに人家が密集し、市街地が展開していることを確認し、歴史的に、南北の安曇野地域の社会・経済は、この道路に沿って発展したことが理解した。その一方で、1980 年代以降になると 147 号線の役割は低下し、これに代わって、その西側を走る「広域農道」が重要さを増してくることが述べられた。これは、もともとは、農水省の管轄する農道として作られ、田んぼ

の間を直線的に走る道路だったという。20 年は、農道沿いにはほとんど家など立っておらず、文字通りの農道だったものである。しかし、「広域農道」は、今では、交通量のきわめて多い幹線道路に変化しており、この道路には、大型駐車場を持つスーパー、大型電器店、安売り酒店、ディスカウント型ドラッグストア、ショッピングモールなどがほぼ 5 km おきぐらいで出店している。逆に、かつて栄えた 147 号線沿いの商店街は衰退してしまい、商業地図はすっかり変わってしまっていることが確認できた。

それに伴って、147 号より西の人口がまばらだった地域にも人家が建ち、集落が出来てきたことを、航空写真の地図資料により確認した。そして、こうした変化をもたらした大きな要因は、1980 年代以降のモータリゼーションの普及であったという見方が示された。自動車による行動範囲の拡大は、通勤圏、買い物圏を大きく変え、広い駐車場を必要とする大型商店が市街地化した 147 号沿いを避け、広域農道沿いに進出したという見解であった。さらに、北アルプス沿いの西側を通る＜山麓線＞は、観光道路として機能しており、美術館、ペンション、旅館などが点在しており、幹線道路で経済主体の住み分けがなされていることを地図資料より確認した。



その上で、かつては、豊科地域、穂高地域、明科地域、堀金地域、三郷地域というように、それぞれが自らのセンターを持ち、相対的に閉じた、自律的な地域を形成していたと考えられるという説明がなされた。にもかかわらず、5 地域の合併が可能になった要因には、80 年代以降のモータリゼーションに伴う経済・社会の変化の影響が少なからずあるだろう、というのが下田平特任教授の見解であった。主要な駅をたどると、駅があって、その周辺に、商店街、娯楽施設、役場、公民館があるというワンセットとなったセンターの構造が、近年のモータリゼーションによる広域化の波にさらされて解体されてきたという見解も示された。

また、ここから、合併後に安曇野地域が直面している問題点のひとつは、合併して成立した新しい市域にとってセンター的なエリアがないという点にあるのではないかと、という考えが提起された。センターを欠くと、安曇野市に属しているという一体性を育むことが難しくなり、住宅地区や商業施設のさらなるスプロール的な拡大、拡散、外部からの移住者の増大によって、地域は、ますますコミュニティとしてのまとまりが崩れる事態が進行していくだろう、と下田平特任教授により独自の問題意識が述べられた。

最後に、地域を研究するときに、もっとも基礎的となる視点は、人口の動きを読むことであるというレクチャーがなされた。地域の人口の動きには、経済、社会の動きがよく表現されている。安曇野地域の人口の動きをまず長期スパンでみると、1975 年ころを境に大きく人口の動きが変わることが読み取れることが資料により提示された。1975 年頃までは、安曇野地域の人口はほとんど変化しておらず、じわじわと減り気味の傾向にあった。言い換えると、1975 年頃までの安曇野地域は、単純再生産、あるいは縮小再生産の状態にあり、経済的には、地域は縮小傾向にあるが、ゆたかな自然がそれほど破壊されずに保存されていたというのが特徴だったことが分かる。ところが、1970 年代後半から、安曇野地域の人口は一転、増加に転じて、現在に至る。これは、松本やその他の地域からの移住が増え、いわゆる＜新住民＞が増えていったことによる。これも、モータリゼーションの進行と重なる経済・社会変化に対応する動きである、という説明がつけ加えられた。

その後、院生からの質疑応答の中で、安曇野市と隣接する明科との比較についての質疑がなされた。例えば、「明科は、ほとんど人口変化のみられない点で特徴があり、土地の絶対面積が少ないので、人口は増えなかったのだろうか」、あるいは、「逆に重要なのは、明科では、人口が減少してもいないという事実ではないか」といった比較検証についての意見が活発に交換された。



（５）農産物直売センターの見学・池田正人氏によるレクチャー

堀金に位置する農産物物産センター「道の駅：旬の味ほりがね物産センター」（以下、堀金物産センターと略）に移動し、16：00 ごろから地域社会イニシアティブ・コースの修了生である池田正人氏により、堀金物産センターの設立の経緯、運営システムの工夫、運営の実態について説明していただいた。

まず池田氏により、堀金物産センターについてのベーシックな情報について教えていただいた。堀金物産センターは、全国の農産物直売所センターの中でも、組織的に非常に大きく成長したケースとして、有名な成功事例である。成功要因を池田氏の視点から分析すると、それは、行政のバックアップがあったこと、農協とコンフリクトを起こさずに済んだことに加えて、農家の女性パワーをうまく活用できたことであるという。農家では一般的に、米の栽培は男性の仕事であり、女性の担当は野菜となる。農家の女性は、従来、作りすぎて余った野菜については、近所に配り歩いていたが、これを換金するために小さな直売所を開設したのが、堀金物産センターの始まりであった。興味深いのは、センターが成長するプロセスは、野菜を自ら販売することで、農家の女性の発言権が増していったこととパラレルに生じたという事実にも見受けられる、と池田氏はいう。自由に使える資金を手にする事で、女性が家庭内で発言権を増すことができるようになり、そのことが、センターを支える強いモチベーションに結びついていったというのである。



また、消費者の方にも、こうした直売所を歓迎する動きが発展したことが、直売所の発展に関係しているという見解が述べられた。一般的に、農産物の流通とは、農協やスーパーなど大規模の流通機構を通じて消費者に届くものであるが、農産物直売所の場合は、消費者と生産者が直接交流するところが、大きく異なる。食の安全性という点で農産物直売所の良さが見直されてきた結果、堀金物産センターが順調に成長してきたという見解が述べられた。例えば、大量生産方式では、「トレーサビリティ traceability」というコンセプトで消費者と生産者のあいだをつなごうとするのだが、実際には、農産物が、どこでどのように作られ、どうやって輸送さ

れて、最終消費者に至っているのかというデータ管理が、あまり有効におこなわれていない。このような実態が、近年の中国製冷凍餃子の事件などによって明るみに出てきており、時代が生産者と消費者とを直接つなげる地産地消のルートを評価し始めてきている。これらの要因が追い風になったのではないかと説明された。

さらに、堀金物産センターの運営条件についても説明していただいた。堀金物産センターの立地は、広域農道に面し、交通の便も良く、公共施設が固まっている場所にある。それゆえ、運営条件についていえば、堀金地区の商業的センターに位置しており有利である。これに加えて、このような地域の商業的センターに農産物直売所を設置することが、地域の新しい活性化策として有効になってきているのではないかと、という独自の見解が述べられた。交通の便の良さから、堀金物産センターは、地域で最も売上げの多い農産物直売所となっていると考えられる。他のケースと比較すると、やはり交通の便が悪い立地にある農産物直売所は、売上げが伸びず、不利のようであり、農産物直売所であればどこでも繁盛するわけではない、と述べられた。

また、堀金物産センターでは、直売に限らず、その他にも、加工場を設けたり、食堂を設けている点でユニークであるという。加工場では、漬物、大根もち、パンなどを作られていることが説明された。

最後に、農産物直売所の運営には、一般的に、農協系、行政系、第三者系等のタイプがあるが、堀金物産センターの場合は、純粋に生産者が中心になっている珍しいケースであること、会員は120～130名で、会員が農産物を持ちこみ、手数料12～13%で、大きい時は10～15%を払って、委託販売する形になっていることなど、運営の実態について説明をしていただいた。これに加えて、安全性については、小さな札に、消毒履歴などの情報を記載し商品に貼って表示したり、特定のコーナーにはエコファーマー認定（経営者の認定と農作業の方法の認定の2種類）を受けた作物を置くことで、健康安全面での効果的アピールをしていることや、地元農家からの野菜の調達に滞る冬季に、その埋め合わせをどうするかについての入荷確保のシステムの確立が問題になっていることなど、その詳しい運営システムについても説明していただいた。

このレクチャーとあわせて、院生は、堀金物産センターの中に入り、運営の状況について現場見学を行った。そして、売れ残った野菜をどうするか、あるいは、在庫を残さないためにどのような値の下げ方をするのかといった販売現場での具体的な工夫について、最後に活発な質疑を行った。その後、全員が一旦堀金公民館に戻り、下田平特任教授のまとめのレクチャーに耳を傾け、本日のワークショップを振り返りながら、最後の意見交換を活発に交した。

